

は し が き

環東アジア研究叢書の劈頭を飾る二冊は、平成二十三年度に採択された新潟大学人文社会・教育科学系の学系プロジェクト「環東アジア地域における社会的結合と災害」（代表・芳井研二）の成果の一部である。

自然災害は古来より人類社会に大きな影響を与えてきたが、高度に科学技術の発達した現代においてもなおこれを根絶することは不可能である。それゆえ、災害とどのような関係を取り結ぶかは人類史特有の課題といえるが、同時に技術水準や生態環境などから地域性・時代性を示すものでもある。災害への対応は個人から国際社会まで様々なレベルでなされるが、家族・親族、村落、職業集団から国家、さらには京都議定書に見られる国家間の国際関係にまで至る種々の社会的結合が大きな役割を果たしてきた。本プロジェクトは環東アジアという歴史空間を対象に、災害やそれをもたらす自然環境に各種社会的結合がどう対処してきたのか検討を進めてきた。第一巻の『環東アジア地域における社会的結合と災害』には六本の論文を収録している。中央アジア・ベトナム・朝鮮・日本という地域差、十一世紀から二十世紀にまでいたる時代差を敢えて捨象して所収各論文を社会的結合と災害という共通テーマに沿って整理すると次のようになる。

矢田論文と山内論文は史料に焦点を当てている。前者は地震被害に関する報告書から生活誌を復元し、地震史料の社会史料としての可能性を指摘している。後者は年代記との対照を通じて日記史料の地震史料としての活用を提言するとともに、地震を契機として行われた祭祀・宗教儀礼に注目する。佐藤論文も災害に関わる記録から、国家による宗教儀礼を媒介とした多民族多言語社会統御の方途を扱っている。祭祀を通じた災害に対する社会的な対応はむろん国家が独占するわけではなく、山内論文は地方官と在地土族を取りあげている。復興に関わる資源の獲得など祭祀以外

の側面でも地域社会やそれを構成する種々の社会的結合が当然これにあたっており、斎藤論文は地方公共団体や地方議会と政府との交渉過程を跡付ける。蓮田論文は交渉の一方の主体となる村落が、災害時に限らず上級権力に対する交渉力を如何にして担保してきたかを検討している。芳井論文では災害後の復旧過程だけでなく予防措置の整備にも目を向け、近代化の過程で様々なアクター間の社会的結合の相互関係がどのように変化していったのかを議論している。

もとより本プロジェクトは一般理論を抽出しようという目的があるわけではないが、地域・時代毎に史料の精粗の差が大きい場合においてはまずは共通性に目を向けることが生産的議論の創発に資するだろう。また、そのような観点を持ちつつも史料に密着した議論を行うことで安易な総合化と一線を画すことが可能になるであろう。

第二巻『近世・近代佐渡越後災害史資料』は資料編で二組の史料を翻刻・再録している。それぞれ天保四年（一八三三）の地震津波による信濃川河口部の被害、一九〇〇年（明治三〇）の佐渡島における水害に関する一級史料である。詳しくは各史料に附せられた解説を参照されたい。

（編集委員会）